り我邦の漢文學の逕路を討ねんとし、その第一着手として近江奈良朝のそれを研究されたのである。全編は序說の外に第一編由來、第一章典籍の傳來、附說漢字傳來以前の文字の有無、漢文の讀法、第二章歸化氏族と漢文學第三章推古朝の遺文、附說憲法十七條に就て、第二編學風、第一章學校及び貢舉、第二章聖學及び人才、第三章學術の氣風、第三編文章、第一章記紀及び風土記、第二章養老令、第三章各種の文體、第四編詩藻、第一章詩と詩集、第二章懷風藻、第五編影響、第一章漢文學と萬葉集、第二章宣命祝詞と漢文學の諸編より成つてゐる。就中憲法十七條と懷風藻の研究は博士の最も力を注がれたもので、前者に就ては之を甲子の發布と讖緯說、十七の數と陰陽思想、法家思想の三項に分ちて論じ、その發布に十二年說と十三年說とあれども十二年甲子を正とし十七條の數及び立法の根本思想は儒佛二敎以外に法家思想が潛めるものとし、懷風藻に就ては之を選者と其の文辭、編次と顯晦、詩形、詩想、詩式の五項に分ちて觀察し、奈良朝の詩は淳樸にして、技巧を弄せる平安朝の詩の上に出づるものあり、思想の薄健にして氣象の敦樸なるは、其の至れるものに至つては漢魏に並び隋唐にも比すべきものがある。殊に吾人をして感歎せしめるものは朝紳高僧の努力、向上的精神であると論じ、尙ほ附錄として懷風藻詩體韻字考が添へてある。全編を通じて廣く和漢の諸書を引用して漢文學の傳來以來の發達、我が國民思想に及ぼした影響を精細に考究論證してあつて學徒を啓發せしめるところ多く特に文學史家の一讀を要するものである。（菊版假綴三四五頁、東京、東洋文庫發行、價參圓）〔松野〕

◉風俗史の研究　櫻井秀著

良著のほまれ高き平出藤岡兩氏の日本風俗史出でてより三十餘年、國史學の進步著しきものあるに拘らず、その一分科風俗史に以後加ふるものあるを見ない時、こゝに今文學博士櫻井秀氏の近業を蒐錄せる「風俗史の研究」の刊行を見るは大いに慶賀すべきものであらう。收むる所のもの「平安朝兒童の精神生活」より「蓮華王院通考」に至る三十五篇、何れも着目すべき研究であるが、多種に

互るが故に今一々につきその內容は擧げない。服飾に關しては「平安朝の染織工藝」を文獻的に取扱へるより、その史的變遷は「維新後に於ける女官服飾の推移」（目次に洩れ居れり）「上苑の西嵐」なる論文中の明治時代にまで下り、歲事に關しては「平安朝に於ける民間の歲事一斑」「近代公家の私的年中行事」、「近世の和歌御會始」、「雛遊史考」、「初春に於ける江城の大奧」「近代玄猪の風俗」等がある。或は藝道發達史の考究に於て、茶道香道に於ける義政實隆等の地位を論じてその誤謬を指摘し、又興隆の所以、道の成立を說く。

蓋し風俗の變遷は時勢の推移と相表裏するものである而して風俗史の本領を國民生活の樣式變遷に關する外的研究とのみするは當らない。「過去の實相！それを正しく知」り「現在を諒解し評價」せん爲に「自ら別途をとつた著者の研究的態度は內的研究にまで進み、他の特殊史に、社會の全般に涉りて最も緊密なる聯絡を保ち、國民文化の眞相を究めんとするにあるのであらう。

それは「平安朝兒童の精神生活」「平安初期の世相」或は「鎌倉時代の服飾變化とその社會的背景」「服飾に現はれたる室町時代の社會的傾向」の諸篇の出づるを見「俗信と歷史的生命」を觀じ、「風俗史上より見たる後水尾上皇と東福門院」に於て階級的背景を說きて公武間の心理的乖離と融合に及び、風俗史的見地より「宮廷と一般民衆との接近」を叙しては近世日本の異種と觀らるゝ階級文化の交綜が文化の荒廢を招かずして却て今日の關係が遙かに形骸化され拘束された接近連鎖となつてこゝに現代的傾向が文化の低級化、史的日本の文化荷擔者の喪失を招き、荒廢に赴くを說いてゐる。

更に「上苑の西嵐」に於て維新前の邦人が批評的精神を保持しつゝ西方文化を觀察したるをあげ、所謂「先覺者」の開國の目的が國民の史的文化の喪失、一民族的文化を唯一の形式と强制するにあつたかと反問し歷史的文化の主張が外來文化と相俟ち國內の文化を豐富ならしめるものであり、所謂「舊文明」の保存は單に國民的愛着の感情から出づる消極的なる企とのみ云へず、そこに積極的意義があると歷史的理性より放つ反感を述べてゐる。

以上は筆者の誤謬獨斷に基く所があるかも知れぬ。こもあれ著者が所謂啓蒙期の風俗史に對してこの書の刊行は大いなる意義があり、裨益する所大なるものがあるを信じて疑はぬ。（菊版 五九四頁、價 四・二〇、寶文館發行）〔寺尾〕

◉日本思想史 上代國民の精神生活

文學博士 清原 貞雄著

數年前發行され世の注意を惹いた日本國民思想史の詳論の第一編として試みられたものである。總說、信仰生活、道德生活、知識生活、感情生活、建國の理想の五章に分れる。上代人の生活を斯く區別して組織化する事は上代人の精神活動から、また史料の性質から多少の不安がないでない。尤も著者もこの點注意して居られるのである。然し古代研究が斷片的のもの、多い時かゝる全體的な考察を加へらる努力、を多さしその續篇の相次で現るゝ事を期待するものである。（菊版 本文 三六二頁、索引 一二頁、三・二〇、中文館）〔藤〕

◉神話學論考

文學博士 松村 武雄著

「神話學の新展開」「日本神話に關する若干の考察」『日本神話と民族文化』『希臘宗教神話の文化史的考察』『希臘宗教神話の近代的變容』『北歐宗教神話の基督教化』『フィンランド宗教神話の研究の覺書』の論文集であるが、各々は著者が序文中にやがては神話學原論、日本神話の研究等に成長すべきものと云はるゝ丈に、充實した力作揃ひである。

第一のものは社會學派其他有力な諸派に亙つてその學說の簡明な紹介と缺點の指摘があり、要を得た概念を得しめる。第二は日本神話に見る顯著な事象の數種について博き傍證による解釋がある。第三は神話にある古代文化を見るのであるが、それは神話其ものからの立論でなく神話を生み出した社會生活の考察であり、優れた日本古代文化史である。第四、五、六の諸篇に於ては一の神話體系が他の文化圈に抱含さるゝ時受くる變容が精緻なる考證によつて辿られる。これは文化一般の上に見る注意すべき問題であるがその一の場合が優れた方法によつて試みられてゐる。また日本神話の考察に際しても示唆